

令和2年9月

【令和2年度 福島県意見交換会 実践の場 企画書（案）】

○題名（仮称）

「東日本大震災からの復興における多様な主体の取組
～東日本大震災から10年の経験を明日の挑戦へ～」

1. 目的

令和2年度は、東日本大震災（以下「震災」という。）から10年目の節目を迎える年であり、かつ、復興・創生期間の最終年である。この間、多様な担い手による活動が展開され、福島の復興が進められてきた。

福島の復興は10年目以降も長い年月を要するため、現在活動中の担い手だけではなく、若い世代を中心に新たな担い手が増えることが不可欠である。

挑戦的な活動の中で課題に直面することは多々あり、課題にどう対処したのか、どう考えたのかという、担い手自身から生じてくるものに知見としての価値が秘められている。

このため、挑戦的な活動をしている多様な担い手に自身の活動に関する内省、言語化をしてもらう機会を設け、各々の今後の活動への糧としてもらうことを目的とする。

また、この機会を通じて前向きな気持ちで今も挑戦し続けている担い手の姿を発信することにより、県内外の、若い世代やかつて福島の復興に関わった経験のある層の関心をひきつけることも目的とする。

加えて、多様な担い手が集まる機会を活かし、各自の知見・技能を互いに共有することにより刺激を生じさせ、相乗効果を得ることも目的とする。

2. 参加者

- ・ 福島県浜通りを中心に、福島の復興のために実践している者
- ・ 「新しい東北」官民連携推進協議会の会員（+会員傘下の企業等）
- ・ これまで協議会の表彰等を受けた者
- ・ その他、次世代を担う若者、まちづくり会社、行政関係者など

3. 開催日程

令和2年11月20日（金）

4. 開催場所

Jヴィレッジ Jヴィレッジホール（福島県双葉郡楡葉町山田岡字美ツ森8）

※傍聴席を用意、オンラインでの傍聴も可能

5. 内容

テーマを「生業の再生」、「コミュニティ形成」、「地域づくり」の3つに厳選する。

復興庁は、「被災地の自立につながり、地方創生のモデルとなるような復興を実現していく」という第1期復興・創生期間（平成28年度～令和2年度）の理念を継承し、令和3年度から第2期復興・創生期間に臨む。

また、「新しい東北」の基本的な考え方として、インフラや住宅等（ハード）だけではなく、人々の活動（ソフト）の復興が必要とされている。

このため、「被災地の自立」と「人々の活動」の両方に着目し、「自ら生活の糧を得ること」や「人と人のつながりにより、住民主体でできることを増やす」などを議論しやすいテーマに厳選する。

○生業の再生

選択理由：生活の糧を得ることは自立した生活の基礎であるため

- ・ 被災地において、糧を得るための視点と工夫

被災地で生業を得るために、何を「地域の魅力・資源」と捉えてきたかという着眼点、行動、その効果を、時系列（段階別）で整理する。課題は何だったか、どのように乗り越えてきたのか、どのようなきっかけがあり、ここまで来ることができたと考えるか。要所での考え方やコツ、資源を抽出する。

- ・ 3年後の生業とその可能性

現在、福島の問題をどのように「資源」と捉えているか、実現したいビジネスの目標は何か、展望を議論し、そのハードルを克服するための素案の出し合い・助言をし合うことで、今後必要な生業のアイデアを検討する。

○コミュニティ形成

選択理由：結びついている人々の集まりが営みの基礎となるため

- ・ 災害後、急性期・慢性期におけるコミュニティの役割

震災後にどのような取り組みがコミュニティ形成に役立ち、感謝されたか、（成果が出なかった取組も同時に振り返りながら）取り組みが成果につながった要因を振り返り、整理する。

- ・ これからのコミュニティと支援者の役割とは

被災経験者の状況・社会の環境は刻一刻と変化する中で、今後コミュニティはどう変化する、どのような役割を持つか。その維持や発展、また自立のために、どのような仕掛け・

関わり・視点が必要か、アイデアを検討するとともに、支援者の役割を検討する。

○地域づくり

選択理由：基礎的な前2テーマの内容を包含しつつ、発展的な議論をするため

- ・ 地域づくりに必要な視点とこれまでの工夫

被災地は、地域の資源が減少した後、新旧様々な人材・資源が集まっている。地域で「地域づくり」をする上で、必要な視点について話し合う。特に、世代、文化など、生活必需よりも高次なものが必要となる背景や、地域外の視点の取り入れ方を議論する。

- ・ 「人」と「人」のつながりによる地域づくり

地域に老若男女様々居る中で、どのような人を・どう集め・どう結び付けることが有効だったのか振り返るとともに、次の世代の地域づくりを担う「人づくり」のアイデアを検討する。

6. 実施の流れ

- ・ テーマごとにミニプレゼンを実施

※ ありがちな「取組自体の紹介」ではなく、「地域課題と着眼点」や「取組時の考えや復興への向き合い方」を主に話してもらうことで、意見交換の基礎とすることを狙う

- ・ テーマごとに意見交換を実施

※ 単に取組や事例を紹介し合う場ではなく、知見・技能に裏付けされた「考え」を共有、理解し合う場にすることで、参加者へ学びや気づきをもたらすことや参加者同士の連携の土壌をつくることを狙う

- ・ 各意見交換の結果をとりまとめ、全体説明

7. 当日の流れ ※今後登壇者等の意見も踏まえて詳細化予定

コンテンツ	時間	概要
開会挨拶	10 分	福島復興局より、復興の現状や 3 テーマで議論する趣旨を説明
ミニプレゼン	60 分 (10×6) 15 分 (入替分と 予備)	各テーマ 2 名の登壇者が以下について発言 - これまでの取組の概要 (※) ※ 極力時間をかけない。取組内容自体は、資料にまとめて事前公表するなどして、参加者に事前学習を促す。一方で事前学習が徹底されるとは限らないため、登壇者入替時などで司会から登壇者の取組紹介 (各 1 分ずつ) をする。 - 取組の背景となった地域課題と着眼点 - 取組を通じて考えてきたこと、今考えていること - 今後の展望 【登壇者】…「新しい東北」関連事業で表彰・顕彰された方等 (各テーマ 2 名、計 6 名) 【傍聴者】…登壇者以外の参加者全て (オンラインでの傍聴も可) 【必要な補助】…タイムキーパー (5 分前から段階的に)
休憩	10 分	意見交換に適した会場レイアウト変更も実施
テーマ別の 意見交換	90 分 (各テーマ 同時進行)	テーマごとのグループに分かれ、以下について意見交換を実施 - 各自の取組 (※) ※ 参加者の自己紹介目的とするため、極力時間をかけない。 概要、順調 or 苦労している点などを簡潔に紹介し合う。 - 話題の切り口は「5. 目的」を参照 【ファシリテーター】…技能を持つ方に依頼 (各グループ 1 名) 【参加者】…ミニプレゼン登壇者含む参加者 (3 グループ各 8 名、計 20～30 名程度。) 【必要な補助】…記録者 (ファシリテーターの負担を軽減)
休憩	10 分	全体会の準備、ファシリテーターによる情報整理のための時間
全体会	15 分 (5×3)	各意見交換の結果をとりまとめ、全体に向けて発表 ファシリテーターが発表を担当
閉会挨拶	5 分	福島復興局より挨拶